

氏 名	胡 <sup>こ</sup> 新 <sup>しん</sup> 祥 <sup>しょう</sup>
学 位 の 種 類	博士（文学）
報 告 番 号	甲第469号
学位授与年月日	2018年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
学 位 論 文 題 目	中日近代新漢語についての研究 ―仏教由来漢語を中心に―
審 査 委 員	(主査) 沖森 卓也 (立教大学大学院文学研究科教授) 金子 明雄 (立教大学大学院文学研究科教授) 陳 力衛 (成城大学経済学部教授)

## I. 論文の内容の要旨

### (1) 論文の構成

序章

第一章 「普通」と「特別」

第二章 「普遍」と「特殊」

第三章 「普及」と「共通」

第四章 「平等」と「差別」

第五章 「結果」と「成果」

第六章 「障碍」と「障害」

第七章 「投機」と「投資」

終章

参考文献

### (2) 論文の内容要旨

本論文は、近代において西洋由来の新概念などを表すために、中国と日本で翻訳語として盛んに造られた漢語、すなわち近代新漢語の成立について考察するものである。近代新漢語は大きく、華製新漢語と和製新漢語に分けられ、後者はさらに、新たに漢字を組み合わせた造語と、旧来の漢語に新しい意味を与えた転用とに分けられる。その転用にも漢籍由来のものと仏典由来のものとがあり、この仏典に由来する漢語の転用を研究対象とし、その対義関係あるいは類義関係にある周辺の語をも取り上げて、相互が近代訳語としてどのような関係にあったか、日中近代語彙交流の視点から考察する。まず、序章では、近代新漢語の定義と分類について述べ、語彙は外国語からの借用によって少なからぬ変化がもたらされるという現象に照らして、梵語から影響を受けた中国語における仏教語のあり方について確認する。そして、それが日本に伝来し、近代に西洋語の訳語へと転用されていき、さらには近代中国に逆輸入されていくという、語彙のダイナミズムに焦点を当てて考察する意義を述べる。具体的には、第一章では、仏教語の「普通」と対義語「特別」（新造語）、第二章では、仏教語「普遍」と対義語「特殊」（中国古典語）、第三章では、仏教語「普及」と類義語「共通」（新造語）、第四章では、仏教語「平等」と対義語「差別」（仏教語）、第五章では、仏教語「結果」と類義語「成果」（新造語）、第六章では、仏教語「障碍」と別表記の「障害」（新造語）、第七章では、仏教語「投機」と類義語「投資」（新造語）を取り上げる。これらの語について、それぞれ、中国の古典および近代における意味、日本に伝来して転じた意味、近代において訳語として成立していく、もしくは転用されていく過程を、資料を博搜して実証的に考察し、仏教由来の漢語としての特質を分析する。

## Ⅱ．論文審査の結果の要旨

### (1) 論文の特徴

本論文は、仏教語を通して中国と日本における語彙交流および近代新漢語としての成立を歴史的に考察するものである。これまで日中同形語、特に同形類義語についての研究が、多く両者がどの点で違うかをめぐって考察されているのに対して、その相違点をさらに究明して、なぜ違うのかという本質的な問題に深く切り込む一方、「普通」「普遍」「普及」などの日中間における類義語についても、その歴史的な背景を詳細に分析すると、そこには軽視できない変遷があり、漢語研究には語誌的研究が必要不可欠であることを述べる。そして、後漢末以降に成立した仏教漢語の中国および日本における語誌を、漢籍や、英華字典・英和辞典などの辞書、蘭学関係の翻訳書などを始めとする豊富な資料によって記述するとともに、近代日本において西洋の概念を訳出する際に造語されていく過程をも克明に分析する。また、仏教由来の新漢語と一対をなす語にも着目して、両者の相関関係を明らかにすることで、近代中国語に逆輸入されていた背景にも言及する。

### (2) 論文の評価

日本における漢語のグループとして仏教系漢語は大きな位置を占めるが、それが単に仏教語として用いられてきただけでなく、一般語として、また、近代における訳語としても大きな役割を果たしていることを明らかにした功績は大きい。特に、仏教語が転義する前提としては一般語としての使用があること、訳語としての成立はその一般語化を前提とすることを例証しえた点も注目される。そして、同形同義語を単純に中国語から日本語へと受け継がれたものと結論付けるのではなく、近代日本における訳語としての意味が現代中国語に与えた影響をも綿密に調べる必要があること、すなわち、日本的要素が大きく関わっている可能性を十分に吟味することが新漢語の研究には必要であるという指摘も重要である。このような認識に立脚して、資料の調査および分析の手順を確立し、語誌を実証的に記述していき、日中の複雑な語彙交流を歴史的に解明するという手法を見出したことも今後の日中間における学術交流において意義深いことである。さらに、仏教語の近代的意味への転用の時期について、従来の指摘をさらに遡らせる発見をしたこと、諸分野の学問や専門用語辞典などを通して、日本語として定着していく過程を解明しえたことも大きな達成であると言える。その一方で、データベースによる用例収集に依存する度合いが高いという指摘もあったが、中国及び日本における、古代から近代に至るまでの膨大な資料に基づき、通時的に注意深く分析し、それぞれの語誌を有機的に捉えた点は歴史的研究として高く評価できる。